

イブニングセミナー四方山話

小西義昭 (KoPEL小西技術士ラボ)

## 1. 始めの一步

真面目な人は別として、原稿は締め切りが来ないと書き始めないものと勝手に思い込んでいる。そして、世の中の他人とは縁を切って斜に構えて生きれば良いと思っていた。それでも何とかあった時代の話である。

ところが、日本機械学会が部門制になり、技術と社会部門が出来た時に興味本位で覗いたところが、5つばかりの研究会が同時に立ち上がることになり、産業・機械工学関連研究会を引き受けさせられて、正面から真面目な技術者と付き合いなければならなくなった。

何もなかったところから部門を創り出し、人を動かして組織化するのを目の当たりにして、有能な人はやるのが違ふと関心をした。が、私には真似が出来ない。

普通の専門領域の部門では共通言語があり、方向性にも共通性がある。横ぐしとなる部門共通の問題を検討する部門といえは聞こえは良いが、専門性が高いほど勝手な方向を向き、共通部分が少ない技術者（当時の言葉で専門バカと呼ばれた）との共通言語を産出す方法が考え付かないが、研究会としては何かをしなければならない。しかし、実際には共通言語として「歴史」「教育」そして「技術」があり、行掛り上で主査になったので成果を出さなくても良いのではないかと開き直り、人生の先輩であり、航空高専、名古屋大、東大とカラーは異なるが、優秀な幹事の先生方に下駄を預けた。

研究会の他に、自分を含めた専門バカ対策をすることとした。

## 2. 講演会付きの懇親会

指導をすることは出来なくとも、聞き手に回ることは出来る。各々の専門以外の講演を聞けば、知識も広がるが、何かに出会う機会が広がる。試しに5回「技術と〇〇」のセミナーを開くことにした。学会繋がりなので講師に不自由は無い。

今から20年以前のモーレツ社会の名残りの時代である。企業の技術者とその上司にしてみれば、専門領域のセミナーは会社の金と時間が堂々と使えるが、何の役に立つかわからない専門外の領域のセミナーには業務をサボって行く後ろめたさがあり、会社は当然支援をしない。

この専門領域外セミナーの位置づけを「技術能力の向上」ではなく、気が向いた時のアフター5で無料の「気分転換、高級な暇つぶし」とした。従って開演は午後6時、無論、建前は学際領域の技術者教育のセミナーである。会費を無料にするために会場は日本機械学会に

よる研究・教育活動の公開セミナーとして大学の教授に教室を貸してもらい、仕事帰りに立ち寄るには交通の便の良いところが必須条件であり、西尾教授に頼んで六本木にある東京大学生産技術研究所（駒場に移転）とした。講師はボランティアであるが、セミナー終了後の懇親会では講師を除いて割り勘という特権（報酬）がある。従って、懇親会付きの講演会ではなく「講演会付きの懇親会」である。

セミナーが何時、何処で行われるかを探るのが面倒な人のために、何日（数字）ではなく毎月の最終水曜日とした。週末が理想だが会場が借りられなければ何にもならないので、最も教室が空いているのが水曜日、企業も「NO残業DAY」というのが理由である。

### 3. 「技術と社会」シリーズ(1997.10~'98.02)

第1回は、青山学院大学もと副学長の三輪修三氏による「歴史における技術—技術の潮流」であり、その後はもと特許庁の富田徹男による「国際市場・技術の変化と特許制度の変質」、都立航空高専教授の吉田喜一氏による「実践的技術教育の試み」、弁護士の近藤恵嗣氏による「技術と法律」、金沢工業大学教授の札野順氏による「工学教育の新しい潮流と技術者の倫理教育」と5回でイブニングセミナーを終了する予定であった。講師はいずれも産業・機械工学連関研究会や、法工学研究会、技術者倫理研究会の仲間であり簡単に決まった。

実は、このイブニングセミナーを始めるにあたって自信が無く、三輪先生に相談したところ趣旨に賛同してもらえたので、当然何らかの協力が得られると勝手に思い込んでいたら、「あとは勝手にやりなさい」ということであり、「さすがに真の教育者」と尊敬と羨望と復讐の念に駆られ、最初の講師をお願いした。そののちに50回目、100回目の講師も快くお引き受けいただいたが、奥様の健康上の都合により学会活動から手を引かれたが、独特の「べらんめえ調」で「自分の蔵書は全て人に挙げてしまったから、もう原稿は書けない」という宣言をなされる格好の良さである。

### 4. 「女性講師」シリーズ(1998.06~'98.10)

何処の委員会でも会場を変えてからの反省会の方が活発な議論がされるのは同じだが、イブニングセミナーはもともと講演会付きの懇親会であるから、20時に講演会が終わってからが本番であり、重要である。懇親会も5回目ともなるとセミナーを続けてはという観客の無責任な意見が出る。酒の勢いというものは素晴らしいもので、「女性講師」シリーズをすることが簡単に決まった。素面になっていざ実行をしようとすると、女性の社会進出が話題になる時代であり女性の講師は希である。

それでも、「イスラム文化と生活—遺跡調査に参加して」権上かおる氏、「環境と美学」橋本典子氏、「株主と経営：コーポレーションガバナンスとキャッシュフロー経営」畠山直子氏、「機械加工の自動化に魅せられて」井上久仁子氏、「日本における英語教育」L. O. Vidahl氏と、多彩な話題を聞くことが出来た。

海外における発掘調査では、現地の食事に馴染めずに、注意されても自分で日本から持ち込んだ食料を隠れて食べて、現地の水に当たり腹を壊し脱落・全滅する「体力はあっても意志の弱い男子大学生」と、経験の差はあれ、「意志の強い大和なでしこ」の差を知らされ、哲

学から美学を見直す教授，第一線の経営戦略コンサルティングパートナー，など実力の世界を生き抜いている女性を見て感心した。

その反面，もと機械技術研究所課長の口からは，NC加工機械の専門家でありNC初期の頃に若い部下を連れて企業に指導に行くと，幾ら技術的な説明をしても企業からの質問はカバン持ちの男性技術者に向けてされるという話をされていた。女性講師は希であると考えていた自分自身が遅れていると反省した。そして，翻訳者と通訳がいるにも拘らず何故日本人が英語を学ばなければならないのかの疑問を，高校を卒業してもなお持ち続けた私は，東洋大学非常勤講師で新宿山吹高校生涯教育教室講師のリナさんに早く合えば良かったのにと悔やんだ。

## 5. 有料化で茶飲み話に(閑話休題)

大企業の社長は伝説でしか知らないが，世界最高峰の技術を持つ中小企業の社長は面白い。このために次の「町の社長」シリーズは5回で終わらずに9回まで続いた。

それとは別に多くな変化が起きた。日本機械学会の方針が変わり無料のセミナーが出来なくなったのである。部門の独立採算が検討され，部門登録者数に比例した交付金と部門活動費の収支が問題にされると無料の講演会における学会が経費も問題になり，有料にせざるを得なくなった。まだ，学会行事に無料の市民公開講座が無かった時代である。

学会の規定では，高額な講演料を避ける意味と思われるが，「2時間で3万円以下」と決まっていた。もともとボランティアの考えで出発したので，無料でも良いが折角ならばと「2時間のセミナー講演で1万円」の薄謝に決めた。これによりセミナー参加費を千円として10人～20人で収支が取れるようにした。

六本木の生産技術研究所は旧陸軍の古い建物であり，地下の教室とはいえ夏は暑いので，講師の了承を得て，徴収した参加費の中から缶コーヒーを買い全員に配った。これは後にペットボトルのお茶に変わり，セミナーは茶飲み話的な柔らかい雰囲気を持てた。

## 6. 「町の社長」シリーズ (1999.03～'99.11)

膨大な部品や大型素材を組み合わせる航空機やプラント産業の分野では，多くの技術者を必要とするため，一般に外企業の方が技術力は高いが細分化された分野では資本額と技術力は比例せず，世界最高の技術力を持つ中小企業が多く有る。町の社長の話は身近でもあり面白い。

日本機械学会のセミナーとはいえ，当初は，なかなか見ず知らずの社長に講演を頼むのは気が引けて，仕事で付き合いしてきた面白い社長に講演を頼むと今まで知らなかった部分の話をしてくれた。

日本スピン(株)の濱中社長はヘラ絞りでロケットのノーズコーンを作る一方でパチンコ屋の大きな看板も作るという話をしてくれたが，大企業でも出来ない想像を超える超難度のヘラ絞りも行うが，その技術を持つ職人は一人だけで彼が休むとその仕事も休みということである。仕事は人が行うものだと思った。

新興セルビック(株)の竹内社長は昔の成型金型屋をそのまま引き継がず，工場の一角に金

型周辺技術開発の会社を作り、常識を破る製品を長年にわたって生み出してきた。傍から見ると道楽か異端児だが、潰れなかったのは昔からの金型工場も同時に経営してきたからである。新技術を産出し、組合せ続けた結果、プラスチック成型をするには何mもある大型機械を事務机に載る微小サイズの成型機にした。賞や特許は数多く有り、今でも血管に入れる金属製ステントを樹脂化出来ないかと意欲的である。

(株)雪ヶ谷制御研究所は、社長と専務の二人だけの会社だが、大企業の技術者を相手の技術コンサルタントを行っている。もともと学生時代に会社を作り、自分で取得した特許で商売もしていたという経歴の持ち主である。技術開発における問題点の解決方法を指導する業務であるので、定常的に仕事に来るわけではないが、人件費は2人分だけという身軽さと能力の高さのために、面白い(難解な)仕事だけを選び好み出来る。

セミナーでは、有人のゴルフ場にレーンを敷き、電気二重相コンデンサーを積んだ電車を走らせ、ホームに付くと瞬時に充電してすぐまた走り出す「架線の無い電車の試作機」の映像と共に話をしてくれた。

展示会で使うビデオを一緒に作ったことのある「(株)いちじゅ」の米加田社長には「映像を生きる」で理科教育用ビデオの製作の話をしていただいたのだが、質問への答えの延長から、労働組合活動の裏話にそれて行ってしまった。普通の講演会では質問の時間が短く特定の人が専門的な質問をするだけで終わってしまうが、様々な質問が出るように講演90分・質問30分と長めに設定したことが面白い結果を生んだ。

「特許よもやま話」「ベンチャービジネスと解析ソフト」「歯車を友に」「硬い技術と柔らかい技術をつなげる」など面白い話が続き、このシリーズは9回まで延長した。

最初のドタキャンがあったのもこのシリーズである。日本機械学会誌への会告原稿の締め切りは行事の2ヶ月前であり、講演依頼をした社長に海外出張が入り「土壇場でキャンセル」になった。空白にするのももったいないので代わりに私がピンチヒッターで「メカトロニクスを試作をする」(人工心臓)という話をした。ゆったりとした時代であった。

## 7. 「学会の裏話」シリーズ(2000.01~'00.05)

学会は裏方で講演会を支える側であり、とは言いながら、実際には会員である委員がボランティアで実務をこなしている。とすれば、たまには裏方に表に出てもらおうと「学会の裏話」シリーズを始めた。最初は機械学会の事務局長、次に、各部門長に依頼して「自分の専門分野以外で面白い話の出来る人」を推薦してもらった。

内容は「技術者の地位向上を目指す学協会—日本の学協会成立と現在抱えている課題—」「自然エネルギー利用のⅠ、Ⅱ」「機械技術者の夢と「生産原論」について」「もんじゅ事故の教訓：新たな流力振動の可能性について」「人工物工学とサービス工学」など様々だが、他では聞けない裏話のシリーズとなった。

### 【閑話休題】

最初の5回で終わる予定が、懇親会で次のシリーズ候補を肴にしていたら24回になっていた。そろそろ終わりにしようと思案したら、酒の力は恐ろしいもので、常連から「関係者の奥さ

んシリーズ」の逆提案をされた。それだけは勘弁してもらおうことで次を検討することになった。丁度、東大生産技術研究所が駒場に引っ越す都合上、会場探しの休憩に入った。幸い、早稲田大学の勝田教授が引き受けてくださったので、次のシリーズは高田馬場へと繋がった。

会場は、六本木（東大生研）の後に、高田馬場（早稲田大学）、御茶ノ水（明治大学）、そして2019年度以降は秋葉原（首都大東京のサテライト）へと移る予定だが、それらの話は次の機会に。

---

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

---

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.38

(C)著作権:2018 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門